

# 中国語教育におけるサイバーレクチャの実施

片岡 昇

関西大学では、ICTを活用した国際連携プログラムとして、中国語教育において「サイバーレクチャ」を実施している。これは、中国の大学と関西大学をビデオ会議システムで結び、中国側の講師が本学の学生に対して授業を行う。2005年度には、北京外国語大学と計12回のサイバーレクチャを実施し、2006年度には同大学と計17回の実施を予定している。ICTの発達により、時空を越えてこのような取り組みができることは、受講者にとって大きな刺激であり、教育効果の向上も見込まれる。しかし遠隔授業の場合、しっかりと受講者に対するサポート体制を整えておかないと、単なるブロードキャストで終わってしまう。授業の目的に応じたデザインを行い、メンターやチューターによる授業支援があつてこそ、効果的な授業となる。さらに国際連携となると、文化や習慣の違いを考慮して、連携先と授業を作り上げていく必要がある。本稿では、ICTを活用した国際連携プログラムであるサイバーレクチャをとおして、得られた学生の反応や問題点について展望する。

## キーワード

サイバーレクチャ、中国語教育、遠隔授業、ビデオ会議、授業デザイン

## 1. はじめに

関西大学では、2004年度に外国語教育研究機構の中国語教育の一環として、サイバーレクチャを開始した。これは、本学と中国の大学とをビデオ会議システムで結び、中国側から中国語に関する授業を配信する形態をとる。ITセンターでは、サイバーレクチャを実施するにあたり、技術的な支援を行ってきた。本稿では、関西大学におけるICT活用授業を通じた国際連携について、その経緯や問題点、そして学生の反応などについて述べる。

## 2. サイバーレクチャ実施までの経緯

### 2.1 関西大学におけるICT活用授業への取り組み

関西大学では、1997年に文部省（現文部科学省）の補助を受け、私立大学ジョイント・サテライト事業を立ち上げた。これを機に、学内では「ジョイント・サテライト及びマルチメディア教育・研究推進委員会」を組織し、教育の情報化に取り組んできた。そのひとつに、遠隔授業の推進がある。当初は、スペース・コラボレーション・システム（SCS）を利用した不定期の合同セミナーなどを実施し、遠隔授業に関するノウハウを蓄積することに努めた。

その後ICTの急速な発展により、ISDN回線で結ぶビ

デオ会議システムを利用したり、ネットワークさえつながってればパソコンとWebカメラの簡単な組み合わせを利用したりして、さまざまな方式での遠隔授業が可能になってきた。さらに、学内ネットワークの整備や、対外接続容量の拡大も進んだ。当初、米国George Mason大学との遠隔協同セミナーをパソコン同士のIP接続で実施したが（上島ほか 2002）、いつ途切れるやもしれない不安定さに祈るような気持ちで送られてくる画像を見守っていたことが思い出される。しかし2004年には、文部科学省国立情報学研究所のスーパーSINETの接続拠点に選定され、IP接続においてもほぼ安定した高画質の送受信が可能になった。

### 2.2 サイバーキャンパス事業

このような流れの中で、2002年から私立大学等において、インターネット等を活用した、世界の大学等との交流を含む大学連携による教育研究の推進を目的とした、私立大学教育研究高度化推進特別補助「サイバーキャンパス整備事業」が開始された。2002年度には、本学から4件選定され、さらに2003年度にも1件選定された。このうち、2003年度に採択された事業が、「広帯域網を利用した中国語・日本語教育の実践」である。

この事業の代表である外国語教育研究機構沈国威教授は、新しい時代の外国語教育として、広帯域ネットワークを利用した遠隔授業（サイバーレクチャ）を実施することをひとつの柱とした（沈 2004）。これを実施するこ

とにより、国内外に分散している高レベル、かつ多科目の授業を受講できるだけでなく、直接対話やディスカッションを通じてコミュニケーション能力の向上が期待できる。

このような教育効果を求めるため、連携先を選ぶ必要がある。これについては、やはり教員の持つ個人的なつながりから相手先を決めるということが多いであろう。今回もその関係から、北京大学、北京外国語大学の2校の候補があがった。実際に両校とも日本の大学との間で遠隔授業の経験があり、設置機材やネットワークなどの技術面では、問題がないことがわかった。

実際に接続テストを経て、2003年度に2度のサイバーレクチャを北京大学との間で行うことができた。しかし、先方の機材運用面で問題が生じ、北京大学との連携をあきらめざるを得なくなった。そこで新たに北京外国語大学と交渉を行い、2004年度に定期的なサイバーレクチャを実施することで合意した。

この事業は2005年度で終了したが、2006年度から文学部内田慶市教授が引継ぎ、「広帯域網を利用した中国語教育・中国語研究の実践」として同事業で継続選定され、2007年度まで実施予定である。

### 3. 2005年度サイバーレクチャ

#### 3.1 サイバーレクチャの技術的側面

サイバーレクチャを実施するにあたって、北京大学および北京外国語大学のハード面での調査を行った。もちろん両大学とも情報ネットワークの整備が進んでいて、IP接続が可能であった。すでにどちらの大学でも、日本の大学とのビデオ会議システムを利用した接続は、経験済みである。接続を行った日本の大学に問い合わせたところ、IP接続で問題ないとの情報が得られたので、本学でもビデオ会議システムを導入し、IP接続することとした。

IP接続にあたっては、お互いの機器に固定IPアドレスを与え、使用ポートをオープンにすることで接続が可能になる。北京外国語大学との接続では、中国側がDHCPでしかIPアドレスを取れなかったこともあり、日本側からの接続ができなかった。したがって、毎回中国側からの接続となった。

サイバーレクチャで使用する教室は、プロジェクタやスクリーン、音響機器等をすでに設置済みであった。したがって、導入したビデオ会議システムの入出力を教室の外部入出力端子に接続することで、比較的容易に実施できた(図1)。

技術的な支援は、これまでSCS等遠隔授業のサポート経験を持つITセンターが、当面受け持つことになった。しかし、機器の操作そのものは容易であるため、サイバーキャンパス整備事業でTAを2名雇用し、サイバーレクチャ時に機器の設置やオペレーションを任せられるようにし



図1 サイバーレクチャの実施教室

た。事前のシミュレーションによる指導と、ITセンター職員が立ち会い、TAが接続作業を行う2回のOJT (On the Job Training) を経て、TAだけでの実施が可能となった。それ以降、ITセンターではトラブル発生時のみの対応へと移行した。

#### 3.2 2005年度サイバーレクチャのテーマ

北京大学と実施したサイバーレクチャの内容は、(1)中国語発音の上達法、(2)漢字の伝播史である。この2回については、トライアル的な意味合いもあり、通信速度等の設定や、映像・音響機器の位置などを確認した。その後接続相手先を北京外国語大学に変更し、2005年度に本格的なサイバーレクチャが始まった。前期・後期の実施テーマを表1および表2に示す。

サイバーレクチャのテーマを見てわかるように、その内容は非常に幅が広い。文法、発音といった中国語の基礎的な要素はもとより、中国語における文化的背景や、伝統・風習といった内容にまで及ぶ。また、中国語と日本語を比較しながら授業を進めていくものもあり、受講者を飽きさせることはなかったといえる。

#### 3.3 サイバーレクチャの実施状況と学生の反応

講師陣についても、日本の大学で研究活動を行っていた講師がいたりしたので、日本あるいは日本語をよく理解していると感じられた。内容によっては、日本語を交えながらの講演となり、受講者も親近感を持って聴講しているようであった。ほとんどの講師の語り口はソフトであり、速度も速すぎず、初級程度の中国語会話がわかれば授業内容を理解できるようである。

このサイバーレクチャは、北京外国語大学の国際交流学院という部署が担当している。ここでは、すでに日本の他大学と遠隔授業の経験を持っていたため、講師もカメラの前での講演に慣れていたといってもよい。とくに感心したのは、講師が小さな手持ちの黒板を準備してい

表1 2005年度前期サイバーレクチャテーマ一覧

回	実施年月日	テーマ（上段：中国語 下段：日本語）	講師
1	2005 4 28	現代漢語語音特点 現代中国語発音の特徴	続三義教授
2	5 26	現代漢語詞彙特点 現代中国語語彙の特徴	李明副教授
3	6 9	中日同形詞対比研究 日中同形語の比較研究	朱京偉教授
4	6 30	現代漢語語法特点 現代中国語の文法特徴	繆小放教授
5	7 7	漢語語音学習方法 中国語発音の学習方法	続三義教授

表2 2005年度後期サイバーレクチャテーマ一覧

回	実施年月日	テーマ（上段：中国語 下段：日本語）	講師
1	2005 9 29	漢語熟語的学習 中国語の熟語の学習について	魯宝元教授
2	10 20	漢語詞匯中的文化因素 中国語語彙の中にある文化的要素について	程裕禎教授
3	11 10	中国民俗 —— 伝統節日習俗 中国民俗 —— 伝統祝日と風習	黎敏助教授
4	11 24	絲綢之路与中外文化交流 シルクロードと東西文化交流	石雲濤教授
5	12 8	現代漢語修辭学習 現代中国語のレトリックについて	呉麗君教授
6	12 22	現代漢語虚詞的学習方法 現代中国語の機能辭の学習方法について	何一薇助教授
7	2006 1 19	孔子与《論語》 孔子と『論語』	張西平教授

たことである。必要に応じてその黒板に文字や図を書き、講師の横に立てて説明を行った（図2）。遠隔授業を実施するにあたり、何事にもデジタルにこだわりがちな技術担当者にとって、小さな黒板に書かれた字は暖か味さえ覚え、「目から鱗」の情景であった。

各授業では、あらかじめ3ページ程度のレジメ（中国語）が講師からメールで担当者宛に提供され、当日それを受講者に配布した。レジメは授業の進行に添った詳しい内容で、受講者が授業中に聞き漏らしてもそれを補える程度であったようだ。また音声学の講演では、舌の位置がわかるような図も示され、補助教材としての役割を果たしていた。

関西大学の受講者は、大学院生が主体で、各回20～50名の参加があった。ほぼ全員が中国語の授業を理解できていたようであり、授業後の質疑応答も活発に行われた。学会等で講師との個人的なつながりを持つ学生もいたので、受講者のモチベーションは比較的高かったといえる。遠隔授業において課題である「緊張感の欠落」

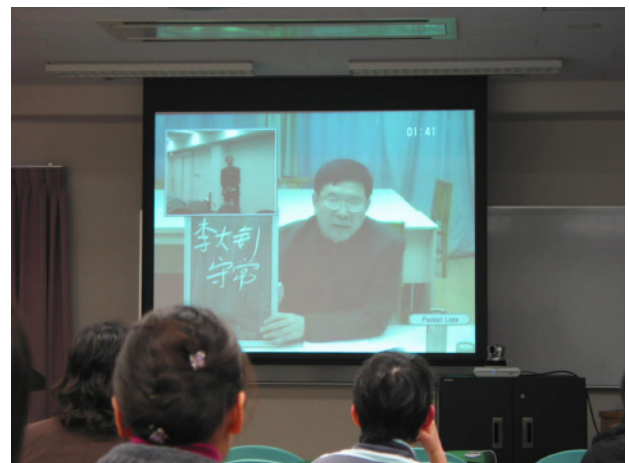


図2 小さな黒板を示す講師

（片岡ほか 2000a）といった雰囲気は、ほとんどないように感じられた。

4. 2006年度サイバーレクチャ

4.1 2006年度サイバーレクチャのテーマ

サイバーキャンパス整備事業が継続して採択されたので、2006年度もサイバーレクチャを引き続き実施することとした。2006年度には、2種類のサイバーレクチャを計画し、ひとつは学部学生も聴講可能な授業形式のもの、他は少人数のどちらかといえばゼミ形式のものである。前者の土曜サイバーレクチャのテーマ一覧を表3に、後者の火曜サイバーレクチャのテーマ一覧を表4に示す。前年度のサイバーレクチャは、約1時間の講義と15分

程度の質疑応答といった授業形式で実施した。その意味からも、本年度の火曜サイバーレクチャは、対話形式に重点を置いた新しい試みといえるだろう。まだ実施回数が少ないため、土曜実施分と大きな差は見られないが、進行方法等今後改善していくことにより、それぞれの特色が出てくると考えられる。

4.2 土曜サイバーレクチャにおける学生の反応

本年度の第2回土曜サイバーレクチャにおいて、参加者にアンケート調査を実施した。アンケートの内容は、

表3 2006年度土曜サイバーレクチャテーマ一覧

回	実施年月日	テーマ (上段：中国語 下段：日本語)	講師
1	2006 5 20	漢語是一种什么样的語言 中国語はどのような言語か	陈小明副教授
2	6 24	漢語的發音体系 中国語の發音体系	丁启陣副教授
3	7 29	漢語的基本語法 中国語の基本文法	繆小放教授
4	9 30	漢語的词汇系統 中国語の語彙体系	李明副教授
5	10 21	漢語的外來詞語 中国語の外來語	王继红講師
6	11 25	普通話与方言 標準語と方言	陈小明副教授
7	12 16	中国的語言与文化 中国の言語と文化	鲁宝元教授
8	2007 2 24	中日対照語法研究 日中対照文法研究	于日平教授
9	3 24	中日詞匯交流 日中語彙交流	朱京偉教授

表4 2006年度火曜サイバーレクチャテーマ一覧

回	実施年月日	テーマ (上段：中国語 下段：日本語)	講師
1	2006 6 6	翻譯過程中的語言转换 翻譯過程における言語変換	陶振孝教授
2	7 11	語序対照与翻译 語順対照と翻訳	陶振孝教授
3	9 26	日語流行語的中译及其背景 日本語流行語の中国語訳とその背景	鲍显阳副教授
4	10 17	中日人名翻译问题及其展望 日中人名翻訳問題とその展望	鲍显阳副教授
5	11 14	中日語法的对照 (关于“主题”) 日中文法の对照 (「主題」に関して)	于日平教授
6	12 12	中日語法的对照 (“时”与“态”) 日中文法の对照 (「時」と「態」)	于日平教授
7	2007 1 16	中日构词的相同点与不同点 日中構造語の共通点と非共通点	朱京偉教授
8	2 13	中日新词的发展趋势 日中新語の發展の趨勢	朱京偉教授

遠隔授業と対面授業における意識調査と、システムおよび授業内容・方法に関する自由記述である。意識調査では、

- 1) 緊張する
- 2) 先生が身近に感じられる
- 3) 先生に質問しやすい
- 4) 他の学生に聞きやすい
- 5) 共同で学ぶ
- 6) 活気がある
- 7) ノートが取りやすい

の7項目における遠隔授業と対面授業での5段階評価を見た。

遠隔と対面授業での対比では、学内の対面授業でネイティブによる中国語だけの授業がないため、純粋な比較ができずスコアがばらついてしまい、傾向がつかめなかった。このサイバーレクチャの参加者は、学部2年生と3年生が多くを占めていた。遠隔授業が初めての学生がほとんどで、比較する基準が明確でなかったことも考えられる。画像の評価についても、以下の両極の記述があった。

「音声も画像も割りと良くてびっくりしました。」(学部2年生 女)

「画像が汚い。見やすいようにもっとへやを暗く。」(学部2年生 女)

遠隔授業を実施するにあたっては、対面授業の延長と考えるには教育効果の向上は望めない(久保田ほか2002)。受講者は、遠隔授業と対面授業の差異を認識し、そのうえで遠隔に「慣れる」必要があると考えられる。このようなことから、アンケート調査については、何度か遠隔授業を受けた後に、再度実施する必要があるだろう。

このサイバーレクチャの参加者は、学年的に見て中国語の理解もあまりできなかったようである。自由記述に、

「面白いが、慣れない相手と全てが中国語なので難しい。」(学部2年生 女)

「日本語の解説をして欲しい(同時通訳)。」(学部3年生 女)

といった内容が多く見られた。また、興味はあるが、遠隔授業の問題点を指摘する以下の記述もあった。

「ネイティブの方の発音で授業を受けるという点ではとてもいいと思った。しかし、遠隔であるため、集中して聞きづらいし、ノートもとりにくい。」(学

部2年生 男)

「とても良かったと思います。留学しない限りこのような授業は体験できないですし、先生とは画面を通してですが、とても集中して聞けました。改善点は、初め先生が1人でずっと話していたので、わからない部分がいっぱいありました。途中で質問ができた方がいいと思います。」(学部2年生 女)

このような学部生の反応に対して、昨年度からTAとしてサイバーレクチャに参加している大学院生(D2)が、終了後のインタビューにおいてつぎのように発言した。

「…この内容は学部生にはちょっと難しいですね。中国語がわからないと思います。院生ぐらいただと、ちょうどいいでしょうね。でもこれだけ音声ははっきり聞こえて映像も来たら、向こうへ行く必要がないですよ。…」

この発言内容は、今回のサイバーレクチャの可能性と問題点を的確に集約しているといえるだろう。

## 5. サイバーレクチャの問題点と今後の課題

### 5.1 技術的な問題

サイバーレクチャを実施するにあたり、さまざまな技術的問題点が発生した。IP接続ということもあり、ネットワークトラフィックの安定性が最重要課題となる。実際に接続中に何度かネットワークが切断してしまうという事態も発生している。いったん切断すると、再度接続してもすぐに切断してしまい、何度か接続作業を繰り返す必要があったので、その時間帯のネットワーク負荷が大きかったのではないかと推測される。

本学がスーパーSINETの接続拠点であっても、海外へ出るとなるとボトルネックが存在しているようだ。しかし、すべての原因が学外にあるとも断定しがたい。学内回線でも、ATM配下とGIGA配下のネットワークでは、GIGAネットワークのほうがパケットロスの発生が少なく、画像が安定していた。もちろん中国国内のネットワーク事情の情報がほとんど得られないため、現状では様子を見ながら対処するしか方法はないようである。

遠隔授業が少人数であれば、ビデオ会議システムの前に集まるだけで問題なく実施できる。しかし、多人数で遠隔授業を受けるとなると、拡声装置などを使用する必要が生じる。そのときに問題となるのが、ハウリングやエコーであろう。音声の明瞭度が低下すると受講者の集中力が低下し、理解も進まなくなってしまう。これについては、事前にマイクの位置や拡声音量などをチェックし、原因を取り除いておかなければならない(片岡ほか2000b)。

システムにはエコーキャンセラも含まれていることが多いが、これも使い方によっては逆効果になる。対処法としては、双方同時に話すのを避けることであろう。トランシーブ的な話し方になるが、そうすることでキャンセラが的確に動作し、スムーズに進行可能となる。

## 5.2 人の問題

サイバーレクチャは、常設の専用教室で行うのではなく、一般の授業で使用している教室や、本年度では会議室を利用している。したがって、授業開始までにビデオ会議システムを搬入し、接続等のセッティングを行わなければならない。このための人材を確保する必要があるだろう。今回は大学院生のTAを雇用し、担当させる方法を取った。前述のように、事前のOJTが必要であったが、大きな問題もなく任せることができた。

国内外の大学などとICTを活用した連携をとる場合、打ち合わせの段階から実施まで多くの人的資源が必要となる。このようなときにTAを活用することは、教員の負担を軽減するとともに、学生の教育的・財政的な支援もでき、両者にとって非常に有益であろう。

## 5.3 財政負担の問題

サイバーキャンパス整備事業では、講師謝礼や人件費、消耗品等に経常費補助が適用される。したがって、各大学での財政負担は軽減される。しかし、事業の期間が終了するとともに各大学での負担となってしまふ。せっかく築き上げた国際連携が、財政的な問題で中断してしまふのは努力も報われない。継続していくためにも、授業成果等を法人を含めた学内外にアピールし、予算措置を講じる必要があるだろう。

国際連携を行う場合に障害となるのが、商習慣の違いである。国内であれば、講演した講師個人に謝礼を振り込むという形で処理を行うのが通例となっている。しかし、国によっても異なるが、講師個人の口座ではなく組織の口座等に振り込むことを要求されたりする。また、支援スタッフに対する報酬が必要とされる場合もある。さらには海外送金手数料が高額なため、予算を圧迫してしまう。

関西大学でも、初年度にはこのような習慣の違いがわからなかったために、中国側との交渉あるいは法人との折衝で多くの時間と労力を費やした。結局、他大学の前例をもとに1回あたりの報酬を決定し、手数料節約のため、前期・後期の各終了時にまとめて送金することで落ち着いた。

## 5.4 今後の課題

ICTを活用した国際連携として、サイバーレクチャを昨年度から実施してきた。これにより、さまざまな問題点が明らかになってきたと同時に、今後の課題も見えて

きた。

本年度のアンケート調査から判明したことであるが、学部2～3年生レベルの語学力で、60分間ネイティブの遠隔授業を受けることは、負担が大きいのではないかとこの点である。これについての解決策としては、授業を分割することが考えられる。話題ごとに区切り、それぞれで質問を受け付け、問題点を解決していく。そうすることで気分転換をはかり、集中力を持続させることができるのではないだろうか。

質問は中国語でできればいいが、無理な場合は通訳する。あるいはメンター、チューターを配置し、彼らが対処することも考えられる。

また、レジュメをあらかじめ配布することも効果的ではないだろうか。それをもとに予習したうえで遠隔授業を受けると、理解度が大きく変わる。さらに、サイバーレクチャをビデオ収録し、それをWeb上で公開することを現在検討している。そうすれば、わからなかった部分を「何度でも」繰り返し復習することが可能になり、一層大きな教育効果が期待できるだろう。

遠隔授業を実施する場合、とくにそれが海外との連携ということであれば、授業時間中だけでなく、その前後の支援も重要となるだろう。もちろん、普段の対面授業でもこのようなフォローが必要なのはいうまでもない。ただ、遠隔では教員ひとりですべてに対応することは、到底無理である。教育的な支援はもとより、技術的な面も含め学内の支援体制を整えて臨まないと、せっかくの国際連携も成果のないまま破綻してしまうことになる。

さいわいICTの発展により、きめ細かい支援のためのツール等選択肢が増えたのは喜ばしいことである。電子メールは、事前の打ち合わせや講師への質問、さらには添付機能を利用した資料配布に役立つ。また、授業のためのWebページを立ち上げることで、資料の閲覧や授業ビデオの公開等、多くの機能を付けることができる。BBSは、受講生だけでなく講師、教員、TAも含めたコミュニティを構築し、議論・交流の場を提供する。

日々進歩するICTを利用することで、対面していなくても人と人のつながりを強く作れる。国際連携では時差や言葉の壁があるため、それをなくすようなICTによる授業デザインを行う必要があるだろう。技術偏重に陥り、ICTを使っているから大丈夫ということにならないように注意すべきである。あくまで授業を支援するためのツールであることを忘れてはならない(片岡ほか2001)。

## 6. まとめ

ICT活用授業を通じた国際連携について、関西大学で実施している「サイバーレクチャ」を支援する立場から、その成果や課題について述べた。

語学教育にとって、生きた言葉と接することは上達への第一歩であろう。ICTの発達により、現地に赴くこともなく居ながらにして質の高い授業を受けることができるようになった。このように時空を越えたブロードバンドによる遠隔授業は、語学教育のひとつの方向性を示したといえる。

教育効果を高めるために、担当者は授業をデザインし、コーディネータとしての役割も果たさなければならない。さらには、ファシリテータとして受講者に授業理解を働きかける必要もある。技術面も含めた複数のスタッフによる支援体制を整えて実施しないと、成果は得られないだろう。

遠隔授業をさらによくするためには、評価を行うことが肝要である。受講生、スタッフの評価を授業改善に生かし、つぎにつなげていくことが教育効果の向上をもたらすであろう。

ICTを利用した遠隔授業に取り組み始めて、まだまだ日が浅い。とくに国際連携となると、文化や習慣の違いもあり思わぬ障害に悩まされることもある。一つひとつ柔軟に対応し、解決していくことにより、道が開かれるだろう。今後、このような国際連携が増えることが予測される。関西大学でも授業支援のための組織を構築し、国際連携の推進をこれまで以上に図っていく予定である。

## 謝 辞

本稿を作成するにあたり、サイバーレクチャでの参与観察およびアンケート調査を快く許可いただいた、外国語教育研究機構 沈国威教授ならびに文学部 内田慶市教授に感謝申し上げます。

また、サイバーレクチャの準備やインタビュー調査に協力いただいたTAの方々にお礼申し上げます。そして、

アンケート調査にご協力いただいた受講者のみなさま、ありがとうございました。

なお、このサイバーレクチャは、平成15年度より文部科学省「サイバーキャンパス整備事業」の補助を受けて実施しています。

## 参考文献

- 上島紳一、堀井康史、矢島脩三、上田真由美、近藤育雄、森田典樹、“日米3大学衛星・インターネット遠隔共同セミナーの概要—ITの未来像を描く—”、関西大学情報処理センターフォーラム、2001、No. 16、pp.25-34、2002
- 片岡 昇、三輪 勉、久保田賢一、“遠隔授業改善のための一考察”、教育工学関連協会連合第6回全国大会講演論文集、pp.45-46、2000a
- 片岡 昇、久保田賢一、水越敏行、“遠隔講義における技術的背景と利用者の反応について”、関西大学情報処理センターフォーラム、1999、No. 14、pp.25-34、2000b
- 片岡 昇、久保田賢一、“高等教育における遠隔教育の概要とその実践—歴史的視点と事例研究を題材として”、関西大学総合情報学部紀要「情報研究」第15号、pp.39-70、2001
- 久保田賢一、水越敏行編著、“デジタル時代の学びの創出”、日本文教出版、東京、pp.137-160、2002
- 沈 国威、“中国語教育のためのコーパスの構築と応用—関西大学の試み”、関西大学ITセンターフォーラム、2003、No. 18、pp.57-63、2004



かたおかのぼる  
片岡 昇

1980年関西大学工学部電子工学科卒業、2000年関西大学総合情報学研究科修了。1980年関西大学工学部副手、1983年同助手、1994年同専任講師。1993年大阪市立大学博士（工学）。1996年より関西大学ITセンター勤務、遠隔授業支援、マルチメディアコンテンツ作成に従事。日本音響学会、電子情報通信学会会員。

# Chinese-language education via cyberlectures

Noboru Kataoka

Cyberlectures are used for Chinese-language education at Kansai University in an international cooperation program using ICT (information and communications technology) with lectures being presented by Chinese instructors via a video conference system. In 2005, 12 cyberlectures were held in cooperation with Beijing Foreign Studies University and 17 have been scheduled for 2006. The advance of ICT makes it possible to cross barriers of time and space in order to offer very stimulating programs for students with good educational effects. However, in the case of distance learning, simply broadcasting lectures is not sufficient. An effective system can only be realized if the design is based on the aim of the course itself and there is support from mentors and tutors. Also, in the case of international cooperation, consideration must be given to differences in culture and traditions. This report examines the student responses from participation in the program and reviews the issues of such an international cooperation program of cyberlectures using ICT.

## **Keywords**

cyberlectures, Chinese-language education, distance learning, video conference, design of lectures